

学校の休日は、毎月一・六の日でした。五郎は休日ごとに落の沢に帰り、米一升いっしょうをもらつてもどるのが常でした。この一升の米は、藩から配給になつた米のうちから、兄嫁たちがひもじいのをこらえて食べ残したものにちがいありません。

五郎の、一・六の日の休日通いも大変でした。五郎は、以前から下駄げだもぞうりも持たず、はだしで通つていました。夏はそれでも、がまんができました。冬の氷雪の上をはだして数キロの山道を通うことは、たいへん危険でした。立ち止まれば足が凍こぼりついてしまいます。いつも足ぶみしているか、全速力で走るよりほかはありませんでした。足先におぼえがなくなつて危険を感じたときには、途中にある知りあいの家へかけ込んで、少し体をあたためてはまたかけ出すのです。父も兄も、このようすを見ながら、どうすることもできなかつたのです。米一升を五郎にもたせることが精いっぱいでした。